

乾季試験の結果と雨季試験の予定

• 乾季試験の結果

2月に播種して実施していた乾季試験（防虫試験）ですが、5月に収穫し、6月に結果を分析しました。芋虫系害虫の被害に対しては、「合成ピレスロイド系単独」と「合成ピレスロイド系+ネオニコチノイド系混合」ではあまり違いがないこと、莢果の虫こぶ被害に対しては、「ピラソリン系+ネオニコチノイド系」で効果が高い傾向にありました。今後、これらの結果が有意な差であるかを分析します。また、雨季にも同様の試験を行い結果が同じであるか継続して確認をする予定です。

また、乾季に栽培した品種（ブルキナファソ品種、富山大品種など計44種）のうち、家畜による食害を逃れた半数は特性調査を行い、純度が高い形の植物体5本を選び、採種しました。これら採種した種子を雨季試験に利用します。



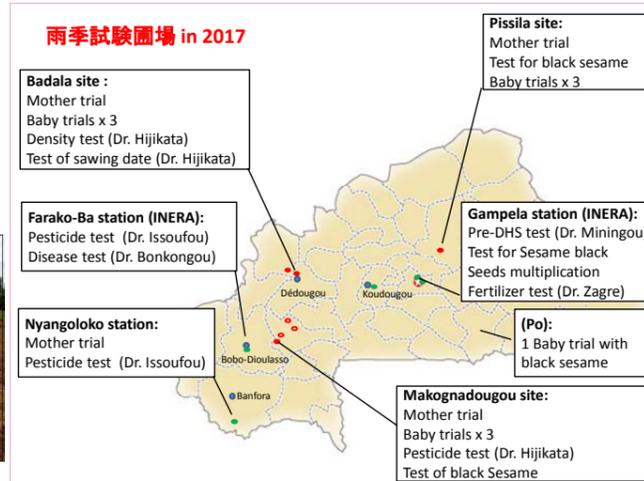
写真5左から：①圃場での作業の様子。②INERA（国立環境農業研究所）の研究者と共に実施した圃場観察。③収穫前のゴマの生育。

• 雨季試験の予定

2017年の雨季試験では、品種特性調査、白ゴマ栽培適正調査および農家参加型選抜、黒ゴマ栽培適正調査、施肥・追肥試験、虫害耐性評価、農業適正試験、病害耐性評価、播種密度試験、播種日試験を実施する予定です。サイトの場所は地図の通りです。播種は7月中に終わりました。



写真6左から：①Pissila圃場、②Badala圃場、での播種作業の様子。



ブルキナファソ国ゴマ生産支援プロジェクト

プロジェクト事務所
03 BP 7123 Ouagadougou 03, Burkina Faso
Tel: +226-67-37-59-80
Email: projetsesame@yahoo.fr
http://www.jica.go.jp/project/burkinafaso/005/index.html

編集室より

今年は雨季の開始が例年より早く、6月上旬から降り始めました。朝晩は気温が25℃を下回って涼しく、日本の方が暑いくらいです。地方出張の際に車窓の風景を眺めると、これまでほぼ茶色一色だった大地に緑があふれています。雨で空気も澄んでいて、今が1年で一番ブルキナファソがきれいな季節なのではないでしょうか。

ブルキナファソ国 ゴマ生産支援プロジェクト ニュースレター



ブルキナファソ国 農業水利省

独立行政法人 国際協力機構 JICA

当プロジェクトの中間レビュー評価の実施

当プロジェクトが開始してから中間時点を迎えたため、6月5日（月）～21日（水）にかけて中間レビュー評価が実施されました。同評価の主な目的は、プロジェクトのこれまでの実施状況や課題を把握して、残りのプロジェクト期間でプロジェクトをさらにより良く実施してプロジェクト目標を達成するための提言をもたらすことにあります。同調査は、JICA本部とJICAパラグアイ事務所から派遣された計6名と、ブルキナファソの農業水利省から任命された2名が合同調査団を結成して実施されました。同調査団は、首都のワガドゥグで農業水利省の関係者にインタビューをし、またプロジェクト対象州であるブックル・デュ・ムーン（BM）州とオーバッサン（HB）州にも訪問して、プロジェクト関係者や裨益者である農民にインタビュー調査を行いました。

調査団からプロジェクトへ、そしてブルキナファソ側に対してなされた提言は表1の通りです。



写真1上から：①普及員と農民にインタビューする調査団。②農業水利省の農村経済振興総局の局長（写真中央、プロジェクトのブルキナファソ側責任者）へ報告する調査団。

表1：中間レビュー調査団の提言

プロジェクトチーム（日本人専門家、ブルキナファソのカウンターパート）への提言	PDM（プロジェクトの成果や活動をまとめた概評表）を改訂すること。
	PO（活動計画表）で各活動の実施責任者を明確にすること。
	実施責任者間で定期的なプロジェクト進捗を共有する打合せの場を設けること。
ブルキナファソ側への提言	各活動の実施責任者は各自の上長に定期的にプロジェクトの進捗報告を行うこと。
	農家への技術普及を担保するために必要な公的農業普及員をどのように巻き込んで、モニタリング・フォローアップ体制をどう強化するか、議論すること。
ブルキナファソ側への提言	予算を拠出できるように最大限努力すること。
	ブルキナファソ側のプロジェクト活動への参加が限定的であるため、ブルキナファソ側が強いリーダーシップ・イニシアチブを持って活動を実施していくこと。
	PDM改訂を進めるためにも、ベースライン調査の結果について早急に審議会を開催すること。

目次：

当プロジェクトの中間レビュー評価の実施	1
2サンプルが基準値を超過 -ブルキナファソ 2産ゴマサンプルの残留農薬検査の結果（流通段階）-	2
残留農薬問題に関するセミナー	2
中核農家への実践研修の開始	3
乾季試験の結果と雨季試験の開始	4

2サンプルが基準値を超過

—ブルキナファソ産ゴマサンプルの残留農薬検査の結果(流通段階)—

ブルキナファソ国内の12カ所の中間業者から収集したゴマサンプルを日本に持ち帰り、日本食品分析センターにてイミダクロプリドの残留値を検査してもらいました。その結果としては、デドゥグの同じ業者から収集した2サンプル(白黒Mixと白ゴマ)から0.01ppm以上のイミダクロプリドが検出されました(0.04ppmと0.02ppm)。デドゥグはプロジェクト対象のBM州の州都でもあり、BM州はゴマ栽培が最も盛んな州でもあります。

また、6月には日本向けブルキナファソ産ゴマから3件のイミダクロプリド基準値違反が発生しました。基準値は7月17日に0.05ppmに緩和され、今回の3件はそれを下回ってはいたものの、プロジェクトでは引き続き、生産者と流通業者の両方に残留農薬の問題を情報発信していきます。



図1: ゴマサンプル(流通段階)の収集地。黄色の△が今回の流通段階のもの。赤色の○は以前に生産者段階で収集した箇所。
地図引用: United Nations Cartographic Section (プロジェクトチーム編集)

残留農薬問題に関するセミナー

6月16日(金)、中間レビュー調査団員でパラグアイのJICA専門家である滝本浩司氏(厚生労働省より派遣)により、農薬に関するセミナーが実施されました。プロジェクトから参加を呼びかけた結果、農業水利省や流通業者などから計51名が参加しました。同セミナーでは、パラグアイでもブルキナファソ同様に残留農薬問題があり、輸出業者の登録制度の設立や産官学の検討会等の活動が紹介されました。また、日本の輸入時検査の仕組みや検査命令の解除条件等が解説されました。また、今年に入って新たに検出されたアフラトキシンの問題と対策にも触れ、残留農薬問題の再発防止に向けての取り組みの必要性を関係者に訴えました。



写真2左から: ①講演をした滝本専門家。②セミナー会場の全体の様子。③質疑応答で対応した3名。左からNIKIEMA課長代行(農業水利省、農村経済振興総局)、伊藤課長(JICA農村開発部)、滝本専門家。④講演後、質問する参加者。

中核農家への実践研修の開始

6月下旬より、BM州・HB州合わせて計66名(33グループ)の中核農家への実践研修を開始しました。実践研修では、理論研修で学んだFFS・FBS*、種子生産を、実際の圃場でまさに実践しながら学んでもらう場です。実践研修はゴマの栽培期に合わせて計7回実施予定です。併せて、ゴマの販売に関する組織能力強化研修も随時実施します。

メインとなるFFSでは、左の図の通り6区画を設けて、認証種子、畝立て、肥料、堆肥のそれぞれの有効性を比較します。7月末時点ではすでに第2回目までの研修を終えており、圃場準備から、播種、施肥、除草・中耕、間引き、農薬散布などの作業を実践しました。

*それぞれ、FFS=Farmer Field School(農民圃場学校)、FBS=Farmer Business School(農民経営学校)の意味。

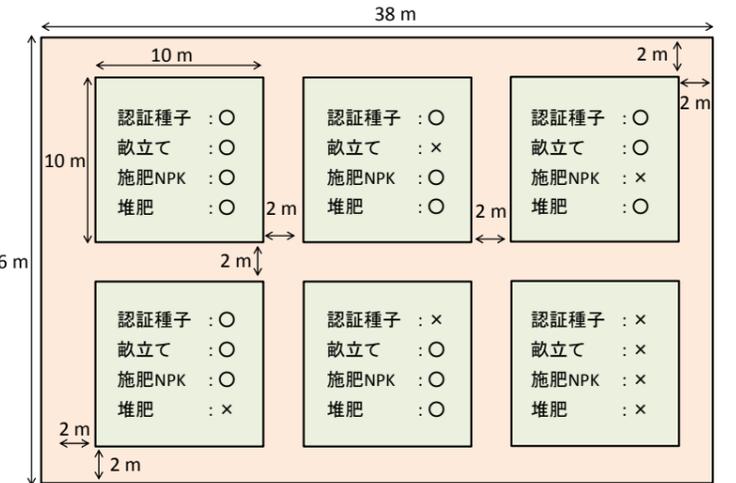


図2: FFS実践圃場6区画の配置

・第1回実践研修



写真3左から: ①FFS圃場の6区画(HB州)。②ペットボトルを用いた播種を実践する研修参加者(HB州)。③種子消毒の説明をする講師(右手前)(BM州)。④種子生産圃場の境界の作り方について説明する種子検査官(講師)(BM州)。

・第2回実践研修



写真4左から: ①苗の成長と病害虫の観察演習(HB州)。②除草・間引き作業の実践をする研修参加者(HB州)。③農薬散布の演習の様子。まずは水で散布機のデモをしている(BM州)。④FBSで農家手帳の記入の仕方を説明する講師(BM州)。